

学生の卒業論文から

先月末、大学は卒業論文の締め切り。メディア論のゼミということもあり、ユニークで楽しいテーマが多いが、ピリッと問題提起も含む、そんな卒業論が多い。

例えば二人の学生はともに、ジャニーズアイドルとファンの関係をメディアの視点から論じた。しかし、二人の意見が対照的なのが、とても興味深いものだった。

一方の学生は、ジャニーズを中心に紹介するアイドル雑誌の研究。この雑誌の「伝言板」というコーナーを、創刊時の一九八八年から現在まで網羅的に閲覧して論じた力作であった。

詳細は省くが、「情報の少なさ」を、雑誌がうまく活用してきたというのが結論だ。読者であるファンは、月に一度の雑誌の発刊を心待ちにしながら、断片的なアイドルの情報を楽しむ。その情報の希少性が、逆に、アイドルに対するファンの夢や想像力をかき立ててきたのだと分析する。

もう一人の学生の卒論は、最近、ネットを活用しはじめたジャニーズの変容を、ファンがどう感じているか。聞き取り調査から明らかにするということものだ。

結果は、アイドルの情報が増え、身近に感じる事ができてうれしい、というものだった。またジャニーズのファン以外にも気軽に視聴を勧められる環境が生まれた、という意見もあったという。

やはりネットには、アイドルとファンの距離感をとても近づける効果があるようだ。だが、あまりに近づきすぎると「スター性の消失」も生むのでは、と口にしたファンもいたという。学生はそれを「特別感の喪失への不安」とも付け加えた。

二人の結論は対照的だが、メディア環境の変容が、アイドルとファンの関係に大きな影響を及ぼしているとの指摘は一致している。ここから分かるのは、若者もまた、メディアや時代の急激な変化に戸惑いながら、それに付き合っているということだ。二人の卒論は芸能の分析だが、私には、学生が時代の変化をどう感じているか、その一面を見ることができたものだった。

(静岡文化芸術大学教授)